



バードリサーチ ニュース

2005年4月号 Vol.2 No.4

2005. 4.13.

Photo by Uchida Hiroshi

参加者募集

季節前線ウォッチ 始まりました!

植田 睦之

ベランダバードウォッチに引き続き、2つ目の参加型の調査「季節前線ウォッチ」を立ち上げました。渡り鳥の初認と初鳴きの時期を調べる調査です。

1. 変わってきた鳥たちの生活

温暖化の防止に向けて京都議定書が発効しました。温暖化というと南極の氷がとけるとか、熱帯雨林の伐採とかちょっと遠いところのことに感じてしまうところもありますが身近な鳥にもその影響が出ている可能性があります。

小池さんと樋口さんが2002年に発表した論文(Koike & Higuchi 2002)によると、新潟のコムクドリコムクドリの繁殖開始時期が、早くなり、卵の数も多くなっているその原因として温暖化が考えられるそうです。イギリスでの研究でも多くの鳥たちで同様の傾向が見られています(Crick & Sparks 1999)。



コムクドリ [Photo by 内田 博]

逆に、東京で私が見ている範囲では、渡りの途中に公園に立ち寄るセンダイムシクイの飛来時期が1990年代前半は4月中旬に多かったのが、最近では4月下旬から5月上旬と遅くなっているように感じます。鳥たちの生活に何がおきているのでしょうか?

2. 毎年違う冬鳥の飛来時期

冬鳥に目を向けると、毎年飛来時期が遅かったり早かったりして、話題になります。しかし、それが全国的な状況なのか、一部の地域なのか、あるいは標高によって違うのかなど、実際はあまり良くわかっていません。その理由として

木の実の豊凶が原因だとか、寒さや積雪が原因だとか言われることがありますが、状況がわかっていないので、理由もはっきりしません。



モズ [Photo by 長嶋 宏之]

3. 鳥たちの季節前線を調べてみよう

そこで鳥の飛来日と初鳴きの調査「季節前線ウォッチ」をはじめることになりました。「季節ネタ」なので一般の人が鳥に興味を持ったり調査に興味を持ったりするきっかけにもなると思います。そこで、まずは、一般の人でもわかりやすい身近で特徴的な鳥たちを対象に選びました。



アオバズク [Photo by 伊藤泰一郎]



ジョウビタキ [Photo by 谷英雄]

春の調査では、ウグイスとヒバリの初鳴き、ツバメ、カッコウ、アオバズクの飛来日を調べます。秋の調査では、モズの高鳴き、ジョウビタキとツグミの飛来日を調べます。これらの鳥の初鳴きや飛来を確認しましたら、下記ホームページよりお知らせ下さい。

http://www.bird-research.jp/1_katsudo/index_kisetsu_chosakikka.html

現在、ソフトウェア会社の「株式会社バイトルヒクマ」のみなさんに「ベランダバードウォッチ」と「季節前線ウォッチ」用のWEBデータベースを開発いただいています。先々はもう少し情報を知らせやすいものにできそうですが、その開発のためにも、入力の方等へのご意見がありましたら、お知らせ下さい。できるだけ参考にして改良していきたいと思っています。



季節前線ウォッチのサイトでは調査対象の鳥の説明や鳴き声を聴くことができます。

お送りいただいた情報は、地図上に表示してホームページで見られるようにいたします。ご期待下さい。【植田睦之】

4. 引用文献

Crick, H.Q.P. & Sparks, T.H. 1999. Climate change related to egg-laying trends. *Nature* 399: 423-424
Koike, S. & Higuchi, H. 2002. Long-term trends in the egg-laying date and clutch size of Red-cheeked Starlings *Sturnia philippensis*. *Ibis* 144: 150-152.

調査協力依頼

スズメの死体を拾ったら ～研究協力(サンプル提供)のお願い～

北海道大学大学院地球環境 泉 洋江
科学研究科環境情報医学講座 長谷川 理

スズメのような身近な野生生物に目を向けることは、身近なものから自然を学ぶ良い機会ですし、人間と野鳥のつきあい方を考えていく上でも役立つと思います。

これからの季節、道端を歩いているとスズメのヒナの死体に出くわすことがあると思いますが、皆さんはそんな時、どうされていますか？

私達は、人的環境に依存して生息しているスズメが人間と共存してきた歴史の中でどのように分布を拡大してきたのかに興味を持ち、DNAを用いてスズメがどのような遺伝的地理変異を持っているのかということの研究をしています。

この研究では全国各地からスズメのサンプル(死体など)を集めています。スズメ個体群の遺伝的地理変異の研究は、解析地域数が多ければ多いほどより詳しい解析を行うことができ、日本における地域個体群の存在などを知ることができます。

しかし、まだ調査した地域も少なく、解析に用いたサンプル数も十分ではありません。もっと広い範囲の多くの地域から多数のサンプルを集め、分析、比較しなければ分からないことがたくさんあります。

死体を拾われた際はできるだけ早く個体全体を冷凍保存し、送っていただけると助かります。サンプルをご提供いただける場合は、発送前に下記までご連絡ください。皆さまのご協力をお願いいたします。

● 連絡先・サンプルの送付先

北海道大学大学院
地球環境科学研究科環境情報医学講座
泉 洋江 (イズミ ヒロエ)
e-mail izumi@ees.hokudai.ac.jp
長谷川 理 (ハセガワ オサム)
e-mail osamu@ees.hokudai.ac.jp

〒060-0810 北海道札幌市北区北10条西5丁目A-501
電話 011-706-2251
FAX 011-706-4864

助成金情報

水域環境に関する助成金のご紹介 ～市民グループ活動の成果公表費用を助成～

グループで水辺の鳥の調査や写真撮影などの活動をされている皆さま、その成果を公表してみませんか？公表するのに必要な費用を助成する支援事業のお知らせが届きましたので、ご紹介します。

1. 概要

財団法人日本科学協会では、NGO・NPO・市民グループによる地域の水域環境についての調査・研究・学習活動・保全活動の成果を地元の方々に公表するための費用を助成しています。

■事業名

平成17年度「水域環境をめぐる学習活動等の成果公表支援」事業

■趣旨

地域特性をもつ水域環境に積極的に係わるNGO、NPO、研究・学習グループ等の環境学習活動や保全活動を評価し、その果実を地域社会に還元・浸透させることが急務と考えます。そして、市民一般の意識啓発・高揚に大きく寄与することが期待される成果報告・公開を支援することにより、地域環境へよりよき理解を促進することを目的とします。

■助成金額

100万円を上限として、申請内容を考慮の上、助成額を決定

■助成実績

平成16年度 11団体(最高100万円)

■支援対象

- 団体： トータルに水の係わる世界を様々な形で見つめ、調査・研究・学習活動を行うNGO・NPO・市民グループ
内容： 地域によって様々な局面を持つ水域環境に係わる所見・提案等を効果的な方法で市民一般に報告・公開するもの

■対象公表期間

平成17年8月1日から平成18年1月31日までに実施する活動

■募集期間

平成17年5月9日から平成17年6月6日<必着>まで

■申請書の申込方法

申請書のお申し込みは、電話によりご連絡下さい。

※「水域環境をめぐる学習活動等の成果公表支援」は、競艇の交付金による日本財団の助成金を受けて実施します。

● お問い合わせ先

財団法人日本科学協会
「水域環境をめぐる学習活動等の成果公表支援」係

〒107-0052 東京都港区赤坂1-2-2 日本財団ビル5階
TEL 03-6229-5365 FAX 03-6229-5369
E-mail jss@silver.ocn.ne.jp URL <http://www.jss.or.jp/>

2. 参考ホームページ

「水域環境をめぐる学習活動等の成果公表支援」サイト
<http://www.jss.or.jp/suiiki/index.html>

活動計画

研究誌 Bird Research を発行します！ 植田 睦之

会費を納めていただきながら、発行が遅れていたバードリサーチの研究誌ですが、「Bird Research」という誌名で発行することにして準備を始めました。最初の論文を6月くらいに公開できれば、と考えています。

「Bird Research」はオンライン雑誌で、受理されたものから即座に編集し、ホームページ上で公開します。売りはこの速報性とホームページ上の利点を生かした動画や音声、資料の添付です。投稿者にはPDFファイルをさしあげるとともに、希望者は別刷りを作ることができます。

本文部分は12月までに公開されたものを製本して図書館や博物館、研究室などに寄贈する予定です。

論文作成の際は、投稿規程(http://www.bird-research.jp/1_newsletter/index.html)を参考にして下さい。投稿前の論文作成の相談にも応じますので、その場合はご連絡下さい。記念すべき創刊号です。皆さまのご投稿を心よりお待ちしております。

【相談先】植田睦之 (mj-ueta@bird-research.jp)

東京バードフェスティバル2005に 出展します！

2005年5月14, 15日(土, 日)に東京港野鳥公園で開催される「東京バードフェスティバル」(<http://www.tptc.or.jp/park/event/tbf2005.htm>)にバードリサーチも出展いたします。バードリサーチが進めている参加型調査の宣伝のほか、パソコンを持ち込んでBird Baseなどのデータベースソフトの紹介をする予定です。もしこのイベントに来られる方がいらっしゃいましたら、ぜひバードリサーチのブースにもお立ち寄りください。

●洋上バードウォッチング

すでに参加申し込みは締め切られていますが、東京バードフェスティバルの企画イベント「洋上バードウォッチング」でバードリサーチの加藤ななえが講師を務めます。カワウのコロニーがある第六台場を巡るコースということで、そこに生息するカワウの生態を中心に、水鳥の観察と解説、第六台場の歴史のお話も少しできるかもしれません。この様子は6月号ではお伝えします。

論文紹介

ヒナの防衛と給餌のジレンマ ～共働きするシロカツオドリ～

Lewis, S., Hamer, K.C., Money, L., Griffiths, R., Wanless, S., Sherratt, T.N. 2004. Brood neglect and contingent foraging behavior in a pelagic seabird. *Behav Ecol Socio-biol* 56: 81-88.



シロカツオドリ
【Photo by Victor Loewen, Canada】
※この写真は著作権者の許可を得て使用しています。

シロカツオドリは大西洋に生息している海鳥で、コロニーを作って繁殖していますが、種内のケンカも多く、隣の巣の親鳥が不在にしているとそのヒナを攻撃することがあるそうです。ところが、シロカツオドリの両親はヒナを残して2羽とも出かけてしまうことがあります。

ヒナを巣に残していくと、気温の変化によるストレスと他の親鳥による攻撃にヒナを無防備にさらすことになりませんが、もし共働きができるのであれば1羽ずつ交互に採食に出かけるよりも餌を多く運んでくるすることができます。Sue Lewisさん達は共働きをするかどうかは、この2つの要素の間のトレードオフによって決まっているのではないかと考えました。

そこで、14ペアのシロカツオドリを雌雄ともに捕獲して発信機を装着し、また、巣の下に体重計を仕掛けて、採食トリップの時間や巣の滞在時間、親鳥の体重などをヒナの成長段階ごとに調べました。

孵化後3週目の段階までは共働きは一度も観察されませんでした。これは体温調節がまだ上手くできないと考えられていた期間と一致しました。その後も5週目までは共働きは全体の採食トリップのうちの2%しか観察されませんでした。9週目以降は32%にまで増加しました。

共働きは2羽同時に巣を離れるのではなく、片親が採食に出かけている間に残された方の親鳥が巣を離れることによって起きるのですが、後から巣を離れた親鳥はいつもよりコロニーに近い場所で採食し、早めに戻ってくるようです。この傾向はヒナが小さい時に顕著でした。ヒナが大きくなると採食トリップにかかる時間は長くなりました。

後から出かけた親鳥はいったん帰ってきた後、先に出かけた片親が戻ってくる前にもう一度ヒナを巣に残して採食に出かけることがあるそうです。この時は1回目とは違い、より遠くへ採食に出かけます。「いい加減パートナーが帰ってくるだろうから、ヒナの防衛は彼(彼女)に任せておけばいいや。」とでも考えているのでしょうか？

著者らはシロカツオドリの親鳥たちはヒナのリスクと餌の要求量のトレードオフの問題をヒナの成長段階をもとに解決していると結論しています。

【高木憲太郎】



シロカツオドリのコロニー
【Photo by Victor Loewen, Canada】
※この写真は著作権者の許可を得て使用しています。

スズメ 英:Tree Sparrow 学:Passer montanus

1. 分類と形態

分類:スズメ目 ハタオリドリ科

全長: 140-150mm 翼長: 65-73mm
 尾長: 46-56mm 露出嘴峰長: 9.5-13mm
 ふ蹠長: 16.7-18.9mm 体重: 約24g
 ※全長、翼長、尾長、露出嘴峰長は吉井(監)1989、ふ蹠長はPinowska et al. 1998、体重は佐野 1997より。

羽色: 雌雄同色。頭は茶褐色。背は褐色で黒色縦斑があり、尾は褐色。中雨覆と大雨覆の羽先は白い。眼先から喉が黒く、白い頬に黒斑がある。嘴は黒色、脚は肉色。幼鳥は全体に淡い色で嘴も淡く、嘴基部は黄色で、頬の黒斑と喉の黒斑は不明瞭。



鳴き声: チュン、チュン、ジュジュジュ。さえずりと地鳴きは明確な区別がつきにくい、春先には澄んだ声でチュイーンなどと鳴く。

2. 分布と生息環境

分布: ユーラシア大陸の温帯・亜寒帯域から東南アジアにかけて広く分布する。スズメは世界で6亜種に分類され、*P. m. saturatus*は日本、韓国、台湾、サハリン、*P. m. dilutus*は中国、モンゴル、*P. m. montanus*はヨーロッパ、ロシア、イギリス、トルコ、*P. m. transcaucasicus*はイラン、*P. m. tibetanus*はチベット、*P. m. malaccensis*はネパール、東南アジアに生息している(Summers-Smith 1995)。日本では、北海道から沖縄までほぼ全国に分布している。人が住んでいる離島にもだいたい生息しているが、小笠原諸島には生息していない(佐野 1997)。

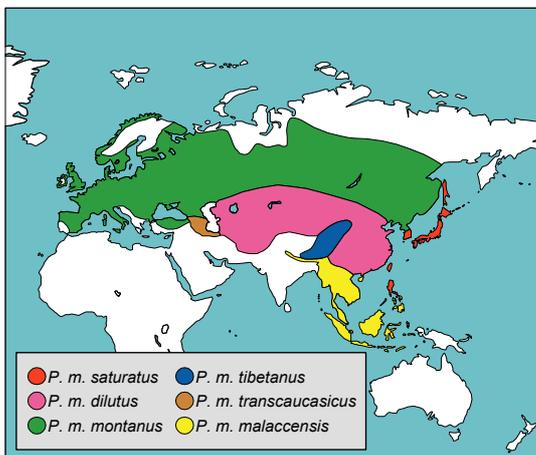


図1. 世界におけるスズメの亜種分布 (Summers-Smith, D. 1995. The Tree Sparrow.より)

生息環境: スズメは食物や棲み場所等を人為的環境に依存しており、人が住んでいないところでは生活できないほど人間生活に密着し適応してきた鳥で、農耕地、市街地、住宅地に住んでいる。4-8月の繁殖期には人家の軒や瓦の間、樹洞に営巣し、その他電柱の穴や換気口、巣箱、鉄パイプ、交通信号機なども利用する。繁殖期間中に2-3回繁殖をする。非繁殖期の秋から冬にかけては草地、稲田に大群で集まり、街路樹、ヨシ原、竹林などに集団ねぐらをとることが知られている。

3. 生活史

月 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12

非繁殖期 繁殖期 若鳥移動期

巣: 枯れ草やワラ、ビニル紐等、産座には羽毛や獣毛を使用。産座の大きさは直径10cmくらい。

卵: 一腹卵数は4-7個(佐野 1997)。大きさは長径17-21.5mm、短径13.5-15.5mmで(吉井(監) 1989)、白灰色の地に灰褐色や灰紫色の斑をもつ。

抱卵・育雛期間:

産卵は1日1個ずつ行い、抱卵期間は12日、育雛期間は14日。巣立ち後も親鳥の給餌を10日間くらい受ける。抱卵、雛への給餌とも雌雄で協力して行うが、雌の方が中心に行う(太田 2000)。



スズメの卵

4. 食性、その他

スズメは基本的に草本の種などを食べるが、昆虫や人間の残飯も食べ雑食に近いといえる。特に育雛期には虫をよく捕る。スズメの羽繕は水浴びと砂浴びの両方を行う。

5. 興味深い生態や行動、保護上の課題

●スズメとニューナイスズメ、イエスズメの関係

日本には、スズメ以外のハタオリドリ科の鳥としてニューナイスズメ(*Passer rutilans*)が生息する。ニューナイスズメはスズメよりも体サイズがやや小さく、植物の種子や昆虫を食べる。生息場所は農耕地や広葉樹林などで、樹洞や巣箱、鉄パイプ等に営巣するが、スズメよりもより自然に近い環境で営巣する。



ニューナイスズメ [Photo by 谷英雄]

1990年に利尻島で初めてイエスズメ(*P. domesticus*)が記録された(佐野 1990)。イエスズメはその後、北海道の礼文島、天売島、積丹町などでも確認されている。イエスズメはスズメと同様に市街地に生息するが、スズメよりも体サイズがやや大きく、イエスズメとスズメの分布が重複している地域(ヨーロッパなど)では、イエスズメが市街地に、スズメはその周辺の農耕地や開けた林などに生息している。



イエスズメ [Photo by 谷英雄]

今後イエスズメが日本に侵入・定着し分布を広げると、イエスズメが現在のスズメの生息地を奪ってしまう可能性がある。その場合、さらにスズメとニューナイスズメの競合も起きるかもしれない。

今のところイエスズメはロシア極東部や北サハリンまで生息地を広げたものの、南サハリンではまだ確認されていない(石城 1992)。利尻島においても2004年夏にはイエスズメは確認されておらず(泉 私信)、定期的に日本に侵入し定着するような様子はまだ見られていない。しかしながら、イエスズメの侵入・定着の動向については今後とも注意深く見守っていく必要がある。

●スズメの移動分散

スズメは一般的に「留鳥」といわれている。確かになわばりをもつ成鳥は1年中同じ場所で生活するが(佐野 1973)、若鳥は秋になると集団で移動することが標識調査でわかっている。スズメの移動例として、新潟県で標識されたものが100～400km離れた富山県、滋賀県、静岡県などで再捕獲され、中には600km離れた岡山県で再捕獲された例があった(黒田 1966)。しかし、スズメが生まれた場所からどのくらい移動・分散して、繁殖するのかはまだよくわかっていないため、今後さらに詳しい調査が必要と思われる。移動個体について繁殖状況を追跡調査することや、DNAを用いた解析も有効かもしれない。

●日本におけるスズメ個体群の遺伝的地理変異

スズメが人為的環境に依存して生息していることを考えると、スズメの分布拡大の歴史が人間の歴史と関係の深い特徴を持つ可能性が高い。そこでスズメがどのような遺伝的地理変異を持っているのかを、マイクロサテライトDNAを用いて調べた。DNAの塩基配列は世代を経るごとに少しずつ変化していく。またその変化の速度はDNAの場所によって異なっているが、マイクロサテライトDNAは、進化速度が速く親子判定や個体群構造の解析に向いている。

本州の2地域(京都府、群馬県)、北海道の4地域(札幌市、函館市、利尻島、知床)について調べたところ、国内のスズメ個体群では、京都、群馬、函館の3地域は顕著な遺伝的な



図2. 遺伝的地理変異のおおよその傾向
京都、群馬、函館の3地域は顕著な遺伝的な違いなかった。しかし札幌、利尻、知床は函館や本州の2地域とは異なる遺伝的特徴を持つ可能性が示唆された。

違いが認められなかった。しかし札幌、利尻、知床は他の3地域とは異なる遺伝的特徴を持つ可能性が示唆された。函館と本州の個体群は似たような構造をもっていたのは、函館が北海道の中でも早くから開拓され、本州と古くから交流があった地域であることが関係しているのかもしれない。

北海道で米、麦などの穀物が盛んに栽培されるようになったのは開拓以降である。スズメはアイヌ語では「アマチカブ(粟・食う・鳥)」と呼ばれており(知里 1976)、開拓以前から北海道に生息していたものと思われるが、現在のような生息地を広げたのは、開拓が進み穀物が栽培され、人が多く住むようになってからではないかと思われる。そのため、北海道(札幌以北)のスズメ個体群は本州個体群よりも後で分集団化されたのかもしれない。

6. 参考文献

- 泉 洋江・東 正剛. マイクロサテライトDNAを用いたスズメ個体群の遺伝的地理変異. 日本鳥学会2004年度大会要旨集.
- 黒田長久. 1966. スズメの標識回収の検討(1924-'43). 山階鳥研報 4: 397-402.
- 太田真也. 2000. スズメ百態面白帳. 葦書房, 福岡.
- Pinowska, B., Pinowski, J. and Hahm, K. H. 1998. Tree sparrows (*Passer montanus saturatus* Stejneger 1886) can be sexed on the basis of plumage characteristics. International Studies on Sparrows. 25: 51-55.
- 佐野昌男. 1973. スズメ個体群の行動圏構造. 山階鳥研報 7: 73-86.
- 佐野昌男. 1990. 北海道利尻島におけるイエスズメの生息確認. 日本鳥学会誌, 39, 33-35.
- 佐野昌男. 1997. 日本動物大百科・第4巻 鳥類II. 平凡社, 東京.
- Summers-Smith, D. 1995. The Tree Sparrow. Guisborough, Cleveland.
- 知里真志保. 1976. 知里真志保著作集・別巻I. 平凡社, 東京.
- 吉井正(監修). 1989. コンサイス鳥名事典. 三省堂, 東京.

執筆者

泉 洋江 北海道大学大学院地球環境科学研究科
生態環境科学専攻

現在、博士課程に在学中。修士課程より遺伝マーカーを用いた鳥類個体群の構造や遺伝的地理変異について研究し始めた。はじめは、身近にたくさんいて気軽に調査できそうという理由でスズメを研究対象に選んだが、実際にスズ



メを調査すると結構大変・・・いつもスズメの頭の良さには参っている。スズメは調べれば調べるほどいろいろな疑問が湧いてきて、とても研究のしがいのあるおもしろい鳥であることを日々感じている。

活動報告

カワウ関東標識調査2005報告

加藤ななえ

東京湾沿岸にある3ヶ所のカワウのコロニーで、毎年巣内のヒナに環境省のメタルリングと個体識別のためのカラーリングを付ける調査を行っています。

これは、カワウ標識調査グループ(世話人代表:福田道雄さん)と日本野鳥の会自然保護室の共同調査として、1998年から行われてきました。しかし、今年の春の繁殖期からは日本野鳥の会に代わりバードリサーチがカワウ標識調査グループと協力して継続していきます。

この調査の目的は、リングをつけて巣立った個体の目撃情報を集めて、移動などの生息状況や、さらには生存期間などに関する基礎的な資料を集積し、カワウの生態解明に役立てることです。

今年は3月12日に第六台場(東京都港区)で85羽、4月7日に行徳鳥獣保護区(千葉県市川市)で67羽、4月9日に小櫃川河口(千葉県木更津市)で184羽のヒナに標識しました。ふかふかのヒナを巣から取り出し、足にリングを装着して元の巣に戻すという作業をひたすら続けるのですが、親が早く巣に戻れるように、この作業は速やかに進め、どんどん移動していかなければなりません。これが意外と重労働で、カワウの糞で汚れないようにカップを着ていると、汗でビショビショになるほどです。カワウのコロニーの中には、魚食性鳥



小櫃川河口のコロニーで標識したカワウのヒナ [Photo by 高橋 夢子]

類特有の臭いに満ちていますが、作業を始めてしばらくすると、この独特の臭いも気にならなくなります。人の鼻は便利にできていますね。

カワウの標識調査について詳しい情報を知りたい方は、カワウ標識調査グループのホームページ(<http://www6.ocn.ne.jp/~cring973>)をご覧ください。【加藤ななえ】



第六台場のコロニーでの調査風景 [Photo by 高橋 夢子]

学会情報

第52回日本生態学会大会 参加報告

第52回日本生態学会大会が2005年3月27～30日にグランキューブ大阪で開かれました。今回も幅広いテーマで様々な分類群を対象とした研究の成果が発表されていました。私は残念ながら最終日しか参加できませんでしたが、いくつか面白い発表を聞くことができました。

30日の口頭発表は、テーマごとに8つの会場に別れて行なわれました。テーマの一つに「英語」というのがありまして、なんとというテーマ設定の仕方をするんだと思いつつも、そちらに足を運びました。日本人の発表でしたが、針葉樹の巨木の先端部の葉が下層の葉とは違う形をしているという話は面白かったです。また、ポスター発表では、メダカの発表に興味を持ちました。メダカには頻繁に移動するタイプと定住するタイプがいたそうなのですが、それぞれの生存率が雌雄で逆転しているという話でした。

大会の最後は自由集会でした。私は「第4回種子散布研究会 鳥の色覚と果実の色彩戦略」というテーマの会場に入りました。鳥の多くは人間には見えない近紫外線を見ることができるそうで、それが生態的にも重要な信号となっている種がいくつも見つかるそうです。一見すると雌雄同色に見える鳥たちも紫外線という要素を加えると、有名なモンシロチョウと同じように、性的な違いが浮かび上がってくるわけです。性選択だけでなく、採食にも紫外線は使われている可能性があります。一見地味な色彩の木の実が鳥たちにはとても色鮮やかに見えているかもしれないのです。鳥たちが実際にはどのように世界を見ているのかを考えながら調査研究することの大切さを学びました。

【高木憲太郎】

日韓カラス科セミナー 参加報告

生態学会の翌日は大阪から京都に移動して京都大学で開かれた日韓カラス科セミナーに参加し、ミヤマガラスの分布調査について話をしてきました。私の講演要旨はホームページ (http://www.bird-research.jp/1_ronbun/index.html) に掲載しています。

最初は松原始さんとChang-Yong Choiさんがそれぞれ日韓のカラス科の鳥とその研究について概説されました。こうして並べて話を聞くと違いがはっきり見えて面白いものです。日本では都市にいるのはハシブトガラスですが、韓国の同じニッチを占めているのはカササギだとか……。Hyun-Young Namさんのカササギの研究の話は、繁殖成功率などのデータがしっかりそろっていて聞き応えのある内容でした。【高木憲太郎】

バードリサーチニュース 2005年4月号 Vol.2 No.4

2005年 4月 13日発行

発行元: 特定非営利活動法人 バードリサーチ

〒191-0032 東京都日野市三沢1-26-9 森美荘 I-102

TEL & FAX 042-594-7379

E-mail: info@bird-research.jp

URL: <http://www.bird-research.jp>

発行者: 植田睦之

編集者: 高木憲太郎